



皇 學 館

学園報 第66号

発行・編集
学校法人皇學館 企画部
TEL 0596-22-6496・8600

大 学 大学院 専攻科 〒516-8555
文学部 教育学部 三重県伊勢市神田久志本町1704
現代日本社会学部 TEL 0596-22-0201(代) FAX 0596-27-1704
高等学校・中 学 校 三重県伊勢市楠部町138
[高校] 〒516-8577 TEL 0596-22-0205(代)
[中学] 〒516-8588 TEL 0596-23-1398(代)

注目記事

2面

地域連携トピックス Vol.2

3面

日系米国人大学生訪日団と交流
外務省・対日理解促進交流プログラム
「カケハシ・プロジェクト」

4面

就職内定者VOICE

5面

皇學館高校・皇學館中学校 卒業生随想

6面 (高校・中学校)

オーストラリアから来た堀本さんと交流
新校友会役員が抱負 ほか

7面

高倉先生の葬儀しめやかに

8面

皇學館大学生テレビ局が優秀賞を受賞
活躍WATCH!



神宮は日本精神文化の源泉であることを念頭に、伊勢志摩共生学を学んでほしいと学長

冒頭、清水潔学長は、この授業を通して「皇學館大学が何を大切にしていくか、を伝えたい」と語った。そしてまずは国

田中卓元学長が制定に尽力

明治六年に定められた年中祭日・祝日は、一年間で十日あり、その一つに二月十一日の「紀元節」があった。初代神武天皇が即位された日を祝う日である。

しかし昭和二十三年、

田中卓元学長が制定に尽力

「国民の祝日」に関する法律が制定された際「建国記念の日」はなかった。実は、法律の原案には戦前の「紀元節」に相当する「建国の日」があったものの最終段階で削除されてしまったのだ。当時

毎年恒例の清水潔学長による年頭講話が一月二十六日に記念講堂で行われた。今年は、一年生の必修科目「伊勢志摩共生学」の授業との合同開催として行われ、約七百五十名が熱心に耳を傾けた。

「建国記念の日と伊勢」テーマに学長が語る

平成二十九年 学長年頭講話

「建国の日」がなかったものの最終段階で削除されてしまったのだ。当時

「国民の祝日」に関する法律が制定された際「建国記念の日」はなかった。実は、法律の原案には戦前の「紀元節」に相当する「建国の日」があったものの最終段階で削除されてしまったのだ。当時

「国民の祝日」に関する法律が制定された際「建国記念の日」はなかった。実は、法律の原案には戦前の「紀元節」に相当する「建国の日」があったものの最終段階で削除されてしまったのだ。当時

「国民の祝日」に関する法律が制定された際「建国記念の日」はなかった。実は、法律の原案には戦前の「紀元節」に相当する「建国の日」があったものの最終段階で削除されてしまったのだ。当時

よりよい社会や暮らしを築くために定めるものであり、また戦前戦後の日本をつなぐ一貫した歴史と伝統を踏まえた最もふさわしい日を定められるべきであり、「それは日

国家の誕生日に日本の本質を考えて

本書紀に伝える神武天皇御即位の日以外あり得ない」という主張を展開。そして同年十二月に建国記念の日を二月十一日」と制定することがついに決定した。

神武天皇御即位の日が「辛酉年正月庚辰朔」であったとする日本書紀の古い伝は、識緯の説によるものであるが、後世から動

かすことは出来ず、これを尊重しなければならぬ。この古伝を詳密な暦学の計算をもつて太陽暦に換算した結果が「二月

十一日」である。神武天皇は天照大御神の五代後の子孫と伝え、神武東征によって九州から大和を平定され、初代天皇として橿原宮に即位された。その経路と御事蹟をルート図を用いて説明し、即位建都の「令」に「民に利あらしめ」祖先の「正しきを養ひたまひし心」をもって徳治に努め、国内を一つにまとめ天下を一つの家族のように和合せしめるという

建国の理想が示されていることを紹介された。そして「建国記念の日はいわば国家の誕生日。自らの誕生日に來し方を顧み、今日あることに感謝するように、建国創業の苦難と栄光の歴史をしのび、国運を開いてきた祖先に感謝し、祖国を愛する心を新たにし、改めて日本国の本質に思いをめぐらしてほしい」と伝えるとともに、最後に、「この日に、感謝と祈りと誓いを込めて、ぜひ神宮参拝しましょう」と呼び掛けられた。

神道学科の吉本祐さんは、「制定までの経緯を今初めて知り、日本の歴史を考えさせられた。時

代を超えて神武天皇即位日に神宮参拝ができることは神道学科生として感慨深い」と語り、コミュニケーション学科の鏡味直澄君は「建国記念の日ができたいきさつを知ることができてよかった。建国記念の日を決める審議会で清水先生の恩師が活躍されたことが印象的だった。柔道部みんなで参拝します」と語った。



鏡味直澄君

吉本祐さん

「ささ」という酒を意味する女房詞がある。女房詞は貴人に仕える女房たちが上品な表現のために直接的な言い方を避けたものだ▼この「ささ」の語源を「酒坏」「酒屋」「肴」に含まれるサカの要素と関係があるのではないかと考えてみた▼「さかな」は「酒の菜」なので、酒を飲むときのつまみである。このとき、サケ(酒)はサカの形となり専門的には被覆形と呼んでサケに比べて古い形と考えられている(有坂秀世)。しかし、「ささ」はこの規則性では説明できないようだ▼調べていくと「和漢朗詠集」に載せられた白居易の詩の中に「蘘の頭の竹葉は春を経て熟す」というのがあり、この竹葉が「ささ」の語源だという。なんと高貴な語源だが、なるほど女房たちもそれほど教養があったということがある▼平安時代の『延喜式』には朝廷の節会などに用いる酒を造ることを掌る造酒司の記載が見えるから酒造りは重要な仕事であったのだろう▼さて、「神都の祈り」が完成した。地酒やワイン開発の先進地は、さらに酒のさかなに取り組んでいる。この酒に合う新しいさかなを六次化で開発することを想像するのはなんと楽しいことだろう。

倉田山 春秋

世界で初めて核兵器が投下された広島県の湯崎英彦知事と、地元三重県の鈴木英敬知事、県内の学生たちによる「平和について考えるトークセッション」が一月十日、本学で開かれた。毎年、両

県で実施されている懇談会に合わせて開催。学生部長である田浦雅徳教授がコーディネーターを務め、本学の学生を含めた三人が両県知事と向き合い、戦争や核兵器のない世界の実現に向けた「想

い」と「行動」をテーマに語り合った。

両県知事が各県の平和への取組みを紹介した後、大学生、高校生、中学生の三人が、それぞれの体験学習を踏まえて平和への想いを発表した。教育学科三年の水野星菜さんは、高校の修学旅行で沖縄県のひめゆりの塔などを訪れたのを機に平和や戦争について考えるようになり、将来は教育現場で子どもたちに、平和の想いや行動の大切さを伝えていく意思を語つ

た。広島県の平和祈念式典に参加した中学生や、カンボジアのポル・ポト政権による残酷な処刑場の跡を訪れた高校生も感想を述べ、現場を見たり体験者の話を聞いて戦争の実感を得る大切さを確認し合った。これを受けて湯崎知事は「実際に現場で受け止めたことをベ

ースに責任を感じ、自分

も何かしなければという気持ちになってくれうれしい」と喜んだ上で、学生らに「大人になっても斜に構えず正面から向き合うこと」が大事だと助言した。

次に平和への行動に

ーマが進むと、学生と知事らは、身近な人々を大事にする小さな行動から広めていくことで意見が一致。この中で鈴木知事は「他の人に同じものを求める姿勢を続けると平和は成り立たない」と指摘し、違う価値観の人々を受け入れる寛容性の必要を強調した。

会場となった会議室には学生らと一般参加者の計約百四十人が詰め掛けて熱心に聴き入る姿が見られ、平和への県民意識の高さをうかがわれた。

平和について自らの考えをしっかりと口調で訴えた学生たち

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

星野ひめゆりさん

湯崎英彦知事

鈴木英敬知事

田浦雅徳教授

水野星菜さん

<

地域連携トピックス Vol.2

地元の方とタッグを組み地域活性

学生、生産者、酒蔵の想いが詰まった「神都の祈り」が完成

地方創生産学官連携「日本酒プロジェクト」

本学と明和町、松幸農産、旭酒造、伊勢萬の五者が連携し、昨年五月に始動した「日本酒プロジェクト」。土壌・水・品種・醸造とすべて地元でこだわりの二つの酒蔵でそれぞれ準備が進められてきた中、伊勢萬の仕込み第一号が完成し、十二月二十日に伊勢萬内宮前酒造場にて醸造祭が執り行われた。

酒米「神の穂」に五十鈴川の水：すべて地元100%の純米吟醸

平成二十八年十二月二十日午前九時、内宮おは



出来立ての「神都の祈り」を手に喜ぶ渡辺さん

酒の香が漂う中「神都の祈り」の醸造祭が厳かに執り行われた。

醸造祭には「日本酒プロジェクト」に関わる明和町の担当者一名、伊勢萬社長、蔵人の二名、本学の教員、学生ら四名のあわせて七名が参列。本学祭式研究部の学生が祭主を務め、修祓、献饌、祝詞奏上の後、出席者一人ひとりが玉串を捧げた。直会では出来たばかりの「神都の祈り」がふるまわれ、一同、新酒特有のふ

くよかな香気を堪能した。

伊勢萬では秋の稲刈り以降、十一月六日に学生らとともに仕込みを開始。今回出来上がったのは記念すべき一本目だ。

年明けには計一〇〇本（七二〇ミリリットル入り）が完成し、三月からの販売を予定している。伊勢萬工場長の船木健司さんは「すっきりとキレのある純米吟醸に仕上がった。『神の穂』を使うのは、地元100%のお酒が完成した。学生、生産者、酒蔵の熱い想いが詰まっているので、お酒そのものの味もさることながら、関わった人々の想いやストーリーも含め、PRしていきたい」と話した。



伊勢萬の船木工場長

旭酒造では醸造りの最終工程を体験

年明けの一月十一日には旭酒造にて「神都の祈り 斎王」の醸造祈願祭と仕込み作業が行われた。

祭典を執り行った後、学生らは「添」「仲」「留」と呼ばれる醸造りの三工程のうち、最終段階である「留」を体験。蒸したばかりの米を手でほぐし、樽に入れてかき混ぜる作業を手伝った。

現代日本社会学科三年の中森一輝君は「想像以上に重労働だった。米をほぐすときは握力が必要で、樽を混ぜるのにも力



無事に醸造されることを祈念

商品化に向け 学生が「ゆず餅」を試作

若者と地域の協創推進事業



上／商品化に向け、材料の分量の微調整を繰り返す学生たち
下／ゆずは元丈の里宮農組合の方たちが耕作放棄地を使って育てたもの

戦後初めて指定を受けた国立公園である「伊勢志摩国立公園」が平成二十八年十一月二十日、指定七十周年を迎えた。

この佳節の記念事業として誘致され、志摩市などで開催された「全国エコツーリズム大会 in 伊勢志摩」に本学のC.L.L活動「あばばい」(伊勢志摩国立公園指定七十周年実行

「あばばい」がエコツーリズム大会in伊勢志摩を宣言

「全国エコツーリズム大会 in 伊勢志摩」●平成28年11/20〜22

委員会「学生部会」が参加。全国の観光業者ら約五百十人を前に、代表の木下大輔君(現日四年)が「先人が築き上げた地域の財産を大切に守りながら生かすため、エコツーリズムを推進する」と力強く大会宣言を行った。

伊勢志摩の魅力、エコツーリズムを正しく伝えたい

木下君は鳥羽市菅島出身。大学生テレビ局八面参照の取材中に会った地元の方から「伊勢志摩国立公園が指定七十周年を迎えるにあたり、ぜひ若者の力を」と請われ、田中貴子さん(現日三年)



大会最終日の11月22日、志摩市の阿児アリーナで大会宣言を読み上げる「あばばい」メンバー

とともに一昨年十月、「あばばい」を立ち上げた。活動する中で感じたのは伊勢志摩特有の自然文化の形。「神宮を中心とした自然崇拜や海女文化など、伊勢志摩地域は自然と暮らし・風習が一体となり、自然景観と人文的景観が見事に調和している」とその魅力を語る。神戸市出身の田中さん

「この地域の人々にとって自然は暮らしの中にある。人間の力ではどうにもできないものであることを理解し、受け入れていく。そうした考え方にとても魅かれる」と話す。

「エコツーリズムを推進し、この素晴らしい自然、歴史、文化を後世に継承するには、これらを適切に正しく発信できる人材が必要」と二人。木下君は四月から鳥羽市の職員となり、行政の立場から地域を愛し活動している人たちのサポートをしていく。

学生らは十月にゆずのトゲ切り、十一月には収穫・加工を体験。この日の餅作りではすりつぶしたゆずの皮、ジャム、粉

末の三アイテムの配合を変えたりして試行錯誤を重ねた。皮をすったものがいちばん香り良く、おいしかったそうで、現代日本社会学科三年の大山健君は「ゆずの香りが利いた餅ができた。地元の人に喜んでもらえる商品に育てたい」とうれしそうに話した。元丈の里宮農組合の深田俊造組合長は「若い人の力を借りて地域を盛り上げる商品を作りたい」と期待を込めて語る。

取組みは平成二十八年八月から同三十年三月まで。開発したゆず餅は今年、販売される予定だ。

で育てた「神の穂」を使った酒が明和の新しい宝になってくれれば」と期待を寄せた。

三月末までに一三〇〇本（七二〇ミリリットル入り）が完成する予定。出荷が待たれる。



「添」「仲」「留」の工程を経て美味しいお酒が完成する。この日の「留」では蒸米145キロが使用された

日系米国人大学生訪日団と交流

外務省・対日理解促進交流プログラム
「カケハシ・プロジェクト」

日本の伝統文化への理解を促進

外務省が推し進める対日理解促進交流プログラム「カケハシ・プロジェクト」による日系米国人の大学生等訪日団(五十三名)が昨年十二月十五日に来学。コミュニケーション学科を中心に約百五十名の本学学生が交流を楽しんだ。

対日理解促進交流プログラム「カケハシ・プロジェクト」は日本と北米の架け橋となる人材を招いて対日理解の促進を図るとともに親日派・知日派を発掘し、日本の正しい姿や魅力を発信してもらうことを目的としている。今回来学したのは全



作法に込められた意味を学び、倭姫宮の手水舎にて手を洗い清める日系米国人大学生ら(右は佐野助教)

米各地からの日系米国人大学生等五十三名。十二月十五日から三日間を三重県で過ごし、神宮をはじめとする伊勢・二見での文化体験、大紀町での民泊など日本の伝統文化や地域住民との交流を通して日本への理解を深めた。

十二月十五日正午過ぎに本学記念講堂前に訪日団一行を乗せたバスが到着すると、コミュニケーション学科の学生など約三十名が出迎えた。まずは倉陵会館へ移動し、ランチ交流会がスタート。

卓上にはちらし寿司やぜんざいなど日本ならではの特別メニューが用意され、学生らは舌鼓を打ちつつ互いの国で流行っているアーティストなどの情報交換、スマートフォンで学生生活の写真を見せ合うなどして盛り上がり



盛り上がったランチ交流会

った。

その後、訪日学生らは神道博物館へ。佐野真人助教が神饌や祭具など展示物を解説しながら神宮や神道における祭りの意味を伝えると、訪日学生らはメモをとりながら熱心に聞き入っていた。倭姫宮では手水や参拝作法の指南の後、実際に一人ひとりが体験した。

続いて訪日学生らは二つのグループに分かれ、一年生の講義「英語コミュニケーションⅡ」に参加。クリストファー・メイヨー准教授のクラスでは本学学生と訪日学生が「日本文化は好き?」などの問いかけから会話を掘り下げ、見識を深めた。

川村一代准教授のクラスでは本学学生が英語で伊勢や神宮、サミットが行われた志摩の魅力を紹介した。

来学した日系四世のキース・マツシタさんは「学生の皆さんが私たちを心から歓迎してくれているのが伝わってきた。参拝体験では、形式的な作法だけでなくその意味も理解できて感動した」と語った。また今回が初来日という日系四世のメルデイス・メイニーさんは「自分のルーツを知りたくて参加した。学生の英語が上手だったので、コミュニケーションがスムーズだった」と語った。また交流会に参加した教育学科三年の橋爪かなさんは「ランチのときに互いの国の生活や流行、大学で学んでいることなどを話せたのが楽しかった。このような交流の機会がもっと増えるといい」と語った。

皇學館中学校

バーチャル英会話教室 実践報告

教務部部長 小林 誠 治

前号(学園報第六十五号)に掲載の「グローバル人材育成プログラム」の中で紹介した「バーチャル英会話教室(NTTラーニングシステムズ)の実践報告をさせていただきます。

内容としては、一回目「自己紹介」・二回目「家族紹介」・三回目「自分の住んでいる町紹介」・関心のあるトピックについてディスカッション」と徐々に範囲を広げテーマを設定しました。最初に基本的な挨拶ややりとりをした後、テーマに基づき講師へのプレゼンテーションを行い、講師からの質問に答えます。次に講

師のプレゼンを聞いて、生徒から質問をするなどのやりとりを行います。また、レッスンの本番前にワークシートを使った事前準備を、レッスン後にはグループワーク・プレゼンによる情報共有を行うなどスピーキング・リスニングはもとより、リーディング・ライティングも含めた四技能の向上を図りました。

一生懸命に伝えようとする姿、楽しそうにおしゃべりをする姿、言い間違いがうまく出てこずに悩む姿など生徒の様子もさまざまでしたが、いざにしても今後の英語学習への大きなモチベーションアップに繋がったことと思います。英語力向上や異文化理解を図るために、実践的なコミュニケーションの一つの機会として次年度以降もぜひ継続していきたいと考えております。



ネイティブの講師と英語で会話を楽しむ生徒たち



ネイティブの講師と英語で会話を楽しむ生徒たち

子どもと地産地消クリスマスケーキ

第二回「地元の食材を知ろう・作ろう・食べようプロジェクト」開催



第二回となる「地元の食材を知ろう・作ろう・食べようプロジェクト」が十二月十八日に開催され、四十四名の親子が参加した。

も安全に作れ、かつ楽しい体験ができる献立をとアイデアを出し合い、二種類の地産地消クリスマスケーキを計画した。

一つは本学学生による「宇治山田プロジェクト」が手がける和紅茶を用い、炊飯器で焼いた生地に地元のブランド苺「かおり野」をトッピングするデコレーションケーキ

「とても満足した」という声に加え「学生たちが夏より成長した」「地産地消の食育レシピを期待している」との感想をいただいた。また、代表の岡村麻里矢さん(教育三年)をはじめメンバー全員、企画・運営と大変だったが自分たちの成長が認められたこと、単に作って楽しかっただけではなく今回

「大学のために自分たちができることを」。そんな思いから、西村勇作君(教育四年・サッカー部キャプテン)と山白龍生君(教育四年・同副キャプテン)がおよそ一年半前から学内の清掃活動をしている。

自分たちで大学をきれいに! 学生有志が清掃ボランティア



号館前の芝生広場周辺を中心に掃除を始めた。秋は落ち葉が多いため、ほぼ毎日行ったという。自主的な活動のため、募集をしないのが二人で決めたルール。しかし、現在、趣旨に賛同して集まった三名(春日裕嗣君・現日三年、家子耀介君・教育四年、濱田拓実君・現日二年)を含め、メンバーは五名となった。四年生が卒業しても、この尊い灯が受け継がれていくことを期待したい。



学生にバナナの切り方を習う子どもたち

「子どもと地産地消クリスマスケーキ」

「子どもと地産地消クリスマスケーキ」

「子どもと地産地消クリスマスケーキ」

「子どもと地産地消クリスマスケーキ」

「子どもと地産地消クリスマスケーキ」

就職内定者VOICE

厳しい就職戦線を乗り越え、見事内定を得た先輩たち。今回は公務員編、一般企業編として成功の秘訣を語ってもらった。

- ①志望理由 ②活用した支援制度 ③苦労・工夫した点 ④一口アドバイス

公務員編

高山夏花(教育)

【内定先】警視庁



①ずっと続けてきた剣道を生かせる、子どもの頃からの夢だった職業。

②出題範囲が広く、何をどう勉強していいかわからなかった。大原の公務員講座を活用した。

③就職担当の方と何度も面接練習をした。④絶対に合格するぞという気持ちを持つこと。長期戦な

ので息抜きも忘れずメリハリのある活動を。

高奥 命(現日)

【内定先】三重県庁



①自身が専門的に学んだ福祉を生かせること、また、先生から公務員の福祉職を勧められたので。

②公務員試験対策講座を受講し、講座で使ったテキストを何度も解いて基礎を定着させた。③大学

で開催される模試を受けて自分の苦手なところを早めに把握し、勉強の計画を立てた。④早めに準備をすると軌道修正や対策も早めにとれる。

西村幸奈(現日)

【内定先】三重県職員行政職



①大学二年生の頃ケガで多くの人に助けられたことがあり、営利に関係なく人助けができる公務員を志望した。②就職課で履歴書の添削をしていた

だった。③面接で落とされると自分には価値がないんじゃないか等悩んだが、クヨクヨしても何も変わらないのでダメでも次頑張ればいいと気持ちを切り替え、諦めずに挑戦した。④日々の積み重ねが大事なので筆記試験の勉強は毎日コツコツと行い、ニュースは必ずチェックする。

小川祐平(現日)

【内定先】伊勢市役所



①産業社会実践インターンシップを履修した際、この場で活躍したいと強く思った。②大原の公務員試験対策や学業以外にもCLL活動に参加した。③公務員と民間企業を併願する中で勉強時間

一般企業編

村上真由(国文)

【内定先】三交不動産



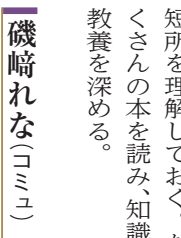
の確保に悩んだ。そこで移動や合間の時間に常に勉強する方法を確立して対処した。④学業以外にも多くの活動を行うほど

堀 貴文(国史)

【内定先】伊勢農業協同組合



自分の可能性や視野が広がり、なりたいたい自分が見えてくる。主体的に行動を！



磯崎れな(コミュ)

【内定先】百五コンピュータソフトウェア株式会社

①初めは教員をめざしていたが、ふと自分には向いていないと気づき、人生を振り返って何ができるのか考えた結果、これからの農業を支えていく存在になりたいと思った。②就職支援室。就職活動に必要なことをすべて教えていただいた。③



谷井由実(教育)

【内定先】三交通株式会社

①教育学部だからといって必ずしも教師になる必要はなく、広い視野で別の道を考えることも大



中村海南斗(現日)

【内定先】株式会社メイカル一光



①今後さらに医療と福祉が必要になってくる中、患者が健康を取り戻し、その家族を笑顔にできる仕事に就きたいと思い、志望した。②大学の就職支援と三重県の就労支援サービス。③企業が求める人物像に合わせにいくのではなく、自分に合った企業を選ぶため、自己分析に多くの時間を割いた。④実務に身を置くことで、インターンシップには積極的に参加しよう

生命の繋がり、農家の苦労を実感

農業インターンシップ報告記

就労体験を通じて農業の可能性や実務を学び、農業就労への意欲を高めてもらおうと三重県農林水産支援センターが進める「農業インターンシップ」事業に三名の学生が挑戦した。以下に参加した学生二名の感想を掲載する。

「現代の稲作」を踏まえ、「現代の神道」を考える

神道学科二年 新海 桃子



農業、とくに稲作について学ぶことは神道の精神を理解する上で欠かせ

ないと思い、参加を希望しました。コンバインで刈り取れない部分の稲を刈ったり、脱穀や乾燥させた米の袋詰め作業をした八日間、繰り返し言われたのは「効率」です。実際、

無駄のない動きは時間の短縮だけでなく、事故やケガの防止に繋がることばかりでした。また、水田で作業をしていると多くの生命に出会います。幾多の命の中で育まれたものを人間が食し、生命を維持していく。その命の繋がりに改めて思い至りました。日本という国の変化にあわせて、神道も変わらなければいけません。今回知った「現代の稲作」を踏まえ、「現代の神道」を考えていきたいと思っています。

将来は農業に関する職業に就きたいと考え、知識を増やすために参加させていただきました。仕事はしいたけの育成です。芽かき(間引き)に始まり、収穫、土の袋詰め、しいたけ菌を入れるといった作業をしました。仕事の内容を正確に覚え、一つひとつできることを増やして作業に取り組みることが大切だと思いました。作業は想像以上

多くの人の苦労と

手間が詰まっている

コミュニケーション学科三年 中村 晋也



に力仕事であり、農業にはやはり若い人の力が必要になってくると痛感しました。今回のインターンシップのように、農業体験ができる機会を増やし、どんどん学生に宣伝していくことが大切だと思っています。また、今回、実際にしいたけを育てたことで、普段なげなく食べている野菜なども多くの人の苦労と手間を経た作られているものなんだと感じました。農業の職に就くことで、今回学んだことを生かしたいと思っています。

皇學館高校
皇學館中学校

卒業生随想

この春、皇學館高校は353名、皇學館中学校は46名が卒業を迎える予定だ。彼らの胸に去来する思いを語ってもらった。

皇學館中学校

46人の絆が深まった3年間

3年A組 小林涼花



「中学生」という名の少し成長した証である制服を身にまとい、初々しい姿で、不安と緊張を胸に抱え、迎えた入学式の日からはや3年が経とうとしている。長いようであつという間だった中学校生活もいよいよ終わりを迎える。

1年生の時、学校行事や部活動など何もかもが初めてで、新鮮に感じた反面、新しい生活のリズムに慣れるのに大変だったことを覚えている。

2年生になり、「先輩」と呼ばれるようになったことに照れくささを感じながらも、また一つ成長できたような気がしてうれしかった。

そして3年生。最高学年となり、みんなをリードしていく立場だということを色々な場面で実感した。46人の絆も3年前と比べ、格段に深まったように思う。

いくつかの衝突や大きな壁が立ちはだかることもあったけれど、どれもこれも大切な思い出として心の中に保存しておきたい。

友情をいつまでも

3年B組 大西諒佑



僕が過ごした中学校での3年間は素晴らしいものだと思います。全学年楽しかったけれど、僕にとっての一番は、修学旅行や皇中祭が決め手ではなく、今の仲間たちと毎日楽しく過ごしてきた日々です。

もちろん、今までの学校行事も忘れられない思い出となりました。合唱で金賞、クラスマッチで準優勝などをとりました。クラス展示では準優勝だったけれど、勝ちよりも、来場者の方々が楽しんでいるのを見て、僕は幸せでした。

3年B組は、皆、元気一杯で、仲良しの明るいクラスです。本当に楽しくて、僕にとってきっと一番のクラスだと思います。

卒業後、僕たちは高校生になります。でも仲間であることは一切変わりません。卒業しても、皇學館中学校で培った友情を大切にしようと思います。3年間、とても楽しかったです。



『和』

3年A組担任 吉田康人

「絶対優勝するぞ！オー！」円陣を組み、力強い声が体育大会、合唱コンクールなどの行事で聞けるようになりました。入学したばかりの頃は、朝礼を行っても緊張した様子で誰ともしゃべらず「シーン」と座っていた光景を今でも鮮明に覚えています。当時は挨拶の声が小さかったり、人前で話すことが苦手だったりする生徒が多かったのではないのでしょうか。学年通信のタイトル『和』は達成できましたか。これは4月に立てた3年間の目標でした。①和(おもてなし)の心を持って誰かのために行動する。②46名の和で大きな力を発揮する。

月日は流れ、卒業が迫った皆さんと日々をすごしていると、本当に『和』が相応しい学年に成長したなと感じます。校友会を始め、多くの場面で学校のために活動している姿、先輩として威厳のある態度で話す姿、そして行事では目標達成のために全員で協力する姿。どれもすばらしく感動すら覚えます。

3月18日で中学校を卒業します。皆さんは将来『和』の心を持つリーダーとして世界で活躍できる人になってください。そのために高校でも勉強はもちろん、多くの事に挑戦してください。『挑戦し続ける人』は「世界で活躍できる人」であるための必要十分条件であると信じて。

皇學館高校

出会いを力に

前総務委員長 3年8組 小林聖也



皇學館高校に入学し3年が経とうとしている今、振り返ればたくさんの方に出会い、支えていただきました。校長先生をはじめ多くの先生方、1年生から3年生のみんなと共に幸せで有意義な3年間を送ることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この広い世界の中で皇學館高校に集まり、出会えた偶然の奇跡を大切にしたいと思います。

卒業したらこの出会いはすべて過去のものとなりますが、きっとこれからの人生の財産になることでしょう。この春からそれぞれの道に向かう私たちにはまだまだ不安があります。ですが皇學館高校での出会いを力にして、これからの人生を精一杯歩んでいきます。

この3年間は3年生全員にとって大きな宝物であるに違いありません。在校生の皆さんも最後に宝物だと思えるような日々を送ってほしいです。今後も皆さんの力で皇學館高校が、いつも笑顔で溢れるような明るく素晴らしい学校であるよう願っています。

人を支えられる人間へ

前総務副委員長 3年7組 島田めぐ



私たち3年生は、春うらかな風とともに卒業を迎えるのでしょう。それは同時に社会への一歩、大人への一歩を踏み出すことも意味しています。今まで周囲の人たちに支えられて生きてきた私たち。しかし社会の一員として人生を歩み始めれば、一人で大切な決断を迫られる時が来るでしょう。時には挫けそうになるくらいの大きな壁が立ちはだかるかもしれません。けれども、私たちには皇學館高校で過ごした3年間があります。楽しい時、辛い時、嬉しい時、悲しい時、すべてを共有し合い、乗り越えてきた仲間がいます。私はそのような仲間たちと共に卒業を迎えられることを誇りに思います。たとえ卒業し、お互いが離れていてもこの3年間の思い出が消えることはありません。この学び舎で、お世話になった先生方、かけがえない日常を与えてくれた仲間たちを励みにして数々の困難を乗り越えていくでしょう。そして今度は私たちが未来を築き、人を支えられるような人間へと一歩踏み出したいと思います。



自主・自立・自律

高校第3学年主任 林浩司

「3年後、そして将来へ」

君たちが入学して間もない頃、このタイトルで作文を書きました。覚えていますか。その作文を今読み返してみると、全く違う3年後の今を迎えている生徒がほとんどです。しかし、この3年間で全力で取り組んだ結果、方向を少し変えただけでまっすぐ成長していることを感じます。誰もが思い通りにはいきません。だから、努力します。そして、仲間ができ、協力をし、助け合います。

そんな光景を校内でよく見かけました。夢を現実にするため、放課後の教室で一生懸命勉強しあっている姿。部活動でよりよい結果を出すために、必死でもがきながら部員一丸となって練習する姿。その、一つひとつが、私の目には美しく感動的に映っていました。

いざ、卒業です。今まで常にそばにいてくれた担任や顧問の先生はいません。そこで、「自主・自立・自律」。これは、本年度の目標でもありました。君たちは、受験を通してかなり身に付いたように思えます。この気持ちで足りず、社会的な地位を失った有名なスポーツ選手やミュージシャンもいます。卒業後もしっかりと心の中に留めておいて欲しいことです。

卒業していく君たちは、この3年間で大きく成長し、たくさんの感謝の気持ちを持つことができたことでしょう。今後は、人に感謝される人に、そして、一歩ずつ、与えられる人から与える人に変わっていったなら…。

私たちは、この皇學館でいつまでも君たちの幸せを願っています。

皇高 NEWS

刺激を与え合った四カ月

オーストラリアから来た堀本さんと交流

日本の高校生活を体験したいとの強い思いから、オーストラリアに暮らす堀本和音さんが来校。昨年の八月二十九日から十二月二十二日までの約四カ月間、皇學館高校の生徒として学校生活を楽しんだ。以下に堀本和音さん、クラスメイトと一緒に過ごした一年七組の生徒の感想を紹介する。

日本の良いところを学ぶことができた

堀本 和音

私は皇學館高校に来て、たくさん学ぶことができて、いい思い出を作ることができました。二学期は皇高祭、体育大会などいくつかの行事があり、仲の良い友だちがたくさんできました。また、この学校に来たことで日本の文化に触れ、日本の良いところを学ぶことができました。たとえば、授業中はとても静かで真面目な人が多いということ。オーストラリアの学校より宿題やテストが多く、今までで一番勉強したと思います。八年前にオーストラリアに引っ越してからほとんどしていなかった漢字の勉強もできました。現代文や生物基礎の科目では新しい漢字をたくさん覚えられました。この四カ月間で多くのことが経験でき、私にとって本当に大切な時間となりました。皇學館高校に来られてとてもよかったと思います。



お別れ会にて笑顔で記念撮影する堀本さん
(前列右から7人目)

熱戦が繰り広げられた大会

武道・バドミントン大会&ダンス発表会

昨年十二月十九日に実施された武道・バドミントン大会。武道選択者は柔道と剣道、それ以外の女子はバドミントンに出場し、日頃の練習の成果を発揮した。なお、三年生男子のダンス選択者によるダンス発表会は昨年に続き三回目の開催となった。

声援と熱気に包まれた会場

総務委員長 山本 瑠香(二年四組)



白熱した柔道の試合

武道大会では剣道と柔道が行われました。剣道では三年生と一年生が日本剣道形、二

年生が木刀による剣道基本技稽古法を披露しました。厳粛な雰囲気の中、二名一組で演技の披露が行われ、見に来た生徒たちの目を引きつけていました。柔道は全学年トーナメントの個人戦で、二分と短い試合時間ながら白熱した戦いが繰り広げられ、会場内は

緊張感あふれるバドミントン大会

総務副委員長 鈴木 優花(二年七組)



応援の声もヒートアップ

三年生は最後の大会ということもあり、いつも以上に気合いが入っていました。一、二年生も自分たちのクラスのペアを一生懸命応援していました。決勝戦に近づくと

新校友会本部役員が抱負

十二月八日に立会演説会・選挙が行われ、七名の新校友会本部役員が誕生した。

総務委員長

白杵 小奈津(二年B組)

去年に引き続き校友会本部役員を務めさせていただきま

総務副委員長

池田 伊織(二年A組)

私が校友会役員を務めるのは二回目、他の役員の人たちよりも役割についてよく知

総務副委員長

落合 慶亮(二年B組)

僕は去年も校友会に立候補しようかと迷っていたけれ

書記

池田 麗菜(二年B組)

笑顔をやさず、みんなが一日一日を楽しんでいるようにしていきたいです。そして、常によりよい学校をめざしていこうと思います。全校生徒の一員として、また校友会役員の一員として頑張っています。

書記

里中 愛華(一年B組)

校友会は初めてのことで、まだ上手くできないことがありますが、役員になったからには一生懸命頑張っていきたいです。一年間頑張るので、よろしくお願いします。

会計

小濱 怜未(二年B組)

私は校友会役員としてこの皇學館中学校をよりよくして

会計

谷水 彩乃(一年B組)

私は校友会本部役員として普段から礼儀正しく、学校では積極的に行動したいです。皇學館中学校を日本一の学校に近づけるために全員で協力し、あいさつと笑顔であふれる学校をめざしたいです。

クラス、個人戦ともに優勝！

百人一首大会

「総合優勝、三年B組。個人戦優勝、三年B組」——結果が発表された瞬間、クラス全員が歓声を上げ、喜びました。放課後、みんなで札の取り合いをした時間。小テストで頑張



「総合優勝、三年B組。個人戦優勝、三年B組」——結果が発表された瞬間、クラス全員が歓声を上げ、喜びました。放課後、みんなで札の取り合いをした時間。小テストで頑張

結果	小町 3B	業平 3B
◆ 遍昭 2B	◆ 喜撰 2B	
◆ 黒主 3B	◆ 康秀 3A	

私にとっては個人戦出場三回目、最上級生として優勝できました。クラスの仲間の応援に感謝したいと思います。

平和への思い新たに

沖縄修学旅行

中学校生活最大のイベントである修学旅行が昨年十一月十日から十二日にかけて行われ、沖縄ならではの文化や風習の違いを満喫した三日間となった。以下に生徒の感想を紹介する。

踊りと歌で楽しいお別れ

三年A組 松岡 彩香

今回の修学旅行で私は三重県と沖縄県との違いを感じました。たとえばサトウキビ体験ではお別れの際に悲しくならないよう、歌ったり踊ったりして気分を持ち上げてから、そのままさよならします。三重にはそうした慣習はないので衝撃的だったし、お別れなのに楽しいという不思議な経験をしました。



首里城の前で記念撮影

またガイドさんが沖縄についてわかりやすく教えてくださったので勉強になったのと

学んだことを次に生かす

三年B組 鈴木 美沙

初めての沖縄。冬でも蚊に刺されるほど暑いということや、同じ日本語なのに全然分らない方言に驚きました。サトウキビ狩りと黒糖作り体験もしました。お別れ時にはカチャーシーをしました。あんなに楽しくお別れをしたのは初めてだったので、新鮮な感じでとても良かったです。ひめゆり平和祈念資料館や上原美智子先生の平和講話では、どれほど戦争が苦しいものか、どれだけ平和な社会が幸せなことかなど実際に体験



「沖縄美ら海水族館」の前にて

した人の日記や話などから学ぶことができました。今回の修学旅行で学んだこと、失敗したことを次に生かしていこうと思います。

*沖縄民謡にあわせて頭上で手を振る踊り

高倉一紀教授の葬儀しめやかに

本書高倉一紀教授が一月二十六日、心不全のため逝去された。享年六十四歳。葬儀は同月三十日に名張市のおきつも会館で執り行われ、参列者は最後の別れを惜しんだ。

高倉一紀教授は昭和二十七年生まれ。同五十年に國學院大學法学部を卒業。同五十七年に皇學館大学大学院文学研究科博士前期課程国文学専攻を修了。同年に本学神道研究所研究嘱託となり、その後、天理大学附属天理図書館、本学文学部講師、助教授を経て教授に就任。平成二十一年から本学附属図書館長を三期六年務めた。



高倉一紀
皇學館大学教授
博士文学・國學院大学

書館協議会委員長、松阪市・津市・桑名市の文化財保護審議会委員等を歴任。教育界のみならず図書館事業の発展や文化財保護に尽力された。

昭和27年 三重県生まれ
昭和50年 國學院大學法学部法律学科卒業
昭和51年 財団法人本居宣長記念館研究員
昭和57年 皇學館大学大学院文学研究科博士前期課程国文学専攻修了
昭和58年 皇學館大学神道研究所研究嘱託
昭和59年 皇學館大学文学部助教授
平成7年 皇學館大学文学部教授
平成9年 皇學館大学文学部教授
平成15年 名張市図書館協議会委員長
平成18年 伊勢市図書館協議会委員長
平成18年 津市文化財保護審議会委員
平成19年 松阪市文化財保護審議会委員、桑名市文化財保護審議会委員
平成22年 博士文学・國學院大学
平成22年 三重県立図書館協議会委員長
平成25年 伊勢市図書館協議会委員長
平成26年 鈴屋学会代表委員、津市子ども読書活動推進会議副委員長
平成28年 鈴屋学会代表委員、津市子ども読書活動推進会議副委員長

【学会】鈴屋学会、日本近世文学会、日本図書館文化史研究会
【研究分野】近世学芸史、書誌学
【著書・論文】『近世書籍文化考―国学の人人とその著述―』（和泉書院）『松平定信蔵書目録』（ゆまに書房）『伊勢商人竹口家の研究』（共著）和泉書院、『射和文庫の蔵書構築と納本―近世書文化論の試み―』（『図書館文化史研究』24）ほか

弔辞

悲しみの涙をぬぐいつつ皇學館大学教授高倉一紀先生の御霊に、謹んで最後のお別れの言葉を申し上げます。

去三日前の一月二十七日朝、ご急逝の報に接した時、仰天、ただ息をのみ、わが耳を疑いました。前日二十六日の夕刻にはお元気で退任記念講義を果たされ、先生を慕う多くの卒業生が駆けつけ、会場は溢れんばかりの盛況でありました。これまでの綿密なご研究を総括された満場を魅了する講義から数時間後、ご帰宅の

電車を途中下車され、帰らぬ人となられるとは、全く何と申すべきこととございましょう。まさに青天の霹靂、いまもお信じ難い思いのこの現実、私ども同僚教職員は悲嘆の淵に沈み、学生達も深い悲しみに堪えかねています。

先生は、本学の大学院に学び、修了後に天理図書館に職を奉じ、この間に恩師と仰ぐ野間光辰先生から学問研究の基礎を徹底的に鍛えられ、以来「実事求是」をもって学問研究の基本姿勢とし、これを一貫堅持してこられました。書誌学を研究の根柢に据えながら、近世中後期の書籍文化史を中心とした学芸史を生涯のテーマとされました。

一作一作が、職人技のよう、妥協のない完璧を期そうとする強い意欲が伝わ

ってくる論文でした。平成二十一年にはそれまでの研究成果をまとめられ、近世書籍文化考―国学の人人とその著述―を上梓され、翌年その著書をもって國學院大學から博士（文学）の学位を授与せられました。その「端書き」の末尾によると、既に次作「近世書文化論」を構想しておられ、いよいよ研究が佳境に入っておられることを感じたものでした。

その頃私は、先生と通勤電車でご一緒する機会がしばしばあり、将来の研究構想や大学のあり方、地域文化活動などについて語り合

う、楽しい時間に恵まれながら、いま退任記念講義のレジュメを拝見して、あ、これは、八年前に構想して居られた研究が大きき

花開いたものであり、その後の先生渾身の研究成果が盛り込まれた内容であることを思い、感銘を覚えたことでした。次の著書がまた

またところまで漕ぎ着けられた満足をもって最終講義を終えられ、多くの教え子達の祝福の花束を受けられた後、三期六年間にわたり図書館長として手腕を発揮されました。図書館学に対する造詣と大学図書館のあり姿を見据えた高い識見をもって、強いリーダーシップでラーニング・コミュニティの開設を始め、専門性をもつ図書館員の配置や意識改革など様々な改革を推進されました。それによって入館者数や貸出し件数が飛躍的に伸び、図書館の活性化に大きな足跡を遺していただきました。

学界、社会貢献の面でも、感を持つていると語り、「戦争や災害など、おじいちゃんやおばあちゃんから生きた知恵を学んで」と訴えた。

後半の板井正斉教育開発センター准教授とのトークセッションではCLL活動の紹介からみ学生への期待を述べ、「こうした活動の場はコミュニケーション能力を高めるチャンス。地域の方と直

れをせねばならぬとは、まさに痛嘆の至りでありま

しかし先生の感化薫陶を受けた門下生は、大きく育ちいま各地で活躍しつつあります。私どもは、先生が本学のために尽力され、学生に情熱を注ぎ指導していただいたご功績を、永く忘れることはないでありましよう。

懐旧の情、哀惜の念は尽きませんが、いよいよお別れの時が近づきました。教育者研究者としての一途な誠心誠意のご足跡に、心より感謝の誠をささげ、謹んでお別れの言葉といたします。

どうか安らかに休みなさい。

平成二十九年一月三十日
皇學館大学長 清水 潔

第4回 三重大学・皇學館大学合同シンポジウム

マチとムラから考える ―伊賀で暮らし続けるために―

日時●平成29年 3月20日(月・祝)
13:00~15:30

場所●ハイトピア伊賀 3階

対象●一般市民
参加無料
事前申込不要

13:00~ 開会挨拶	駒田美弘	三重大学長
13:10~ 講演 1	豊福裕二	三重大学人文学部教授
13:50~ 講演 2	板井正斉	皇學館大学教育開発センター副センター長 准教授
14:40~ シンポジウム	豊福裕二 板井正斉	三重大学人文学部教授 皇學館大学教育開発センター副センター長 准教授
	【コメンテーター】岩名泰岳	美術作家 前・鳥ヶ原村民芸術「蜜の木」代表
	【司会】山田雄司	三重大学人文学部教授
15:20~ 閉会挨拶	清水 潔	皇學館大学長

お問合せ 三重大学企画総務部総務チーム TEL 059-231-9004
皇學館大学企画部地域連携推進室 TEL 0596-22-8635

第56期 学友会が発足

大学と学生を繋ぐ架け橋に

学友会総務委員長 中村 勇 貴
(神道学科2年)

私は一昨年庶務委員、昨年副委員長の計二年間、学友会総務部で務めさせていただきました。その経験を生かして、大学生生活がよりよくなるために、意見箱を復活させ、他の学生がより学友会総務部に関わりやすくなるために学生相談などの活動を行っているこうと思

ます。大学行事以外のことで他の学生の皆さんと接すること、より関わりやすくなると思います。また、大学側と部、同好会である学生側を新入生歓迎会や倉田山清掃などの行事等で繋ぐという架け橋のような存在になりたいと思っています。大人数を動かすわけでありますから、安易なことではないでしょう。しか



昨年12月15日、本学大会議室において第56期学友会総務部の任命式が執り行われた

し、幸い総務部には頼もしい仲間がいます。この仲間と共に協力し合い、頑張っていけますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

時代の変化に対応したアイデアを!

平成28年度 伊勢志摩共生学



ネットやテレビからではなく、現場の人から直接情報を得てほしい、と伊勢市長

鈴木健一伊勢市長による新年恒例の講演会が一月十九日、「伊勢志摩共生学」これからの伊勢」と題し開催され、一年生約七百名を前に密度の濃い話が展開された。

前半を「伊勢の紹介」「これからの伊勢」「私のまちづくり」の三部構成で進出した鈴木市長。市の人口減少に関しては高齢者の経験の断絶に危機

感を持つていると語り、「戦争や災害など、おじいちゃんやおばあちゃんから生きた知恵を学んで」と訴えた。

後半の板井正斉教育開発センター准教授とのトークセッションではCLL活動の紹介からみ学生への期待を述べ、「こうした活動の場はコミュニケーション能力を高めるチャンス。地域の方と直

接触れ合って、時代に合ったプロモーションやアイデアを提案してほしい」と奮起を促した。

神道学科一年の本城暁久君は防災対策の話が印象に残ったと語り「津波避難タワーの建設をさらに推進して欲しい」と話した。教育学科一年の門脇綾香さんはCLL活動の多彩さに驚いた様子で、「どんな活動があるか調べてみたい」と興味を持った様子だった。



門脇さん



本城君

イベント情報 (2~3月)

- 2月

25 土

皇學館大学共催講座

近鉄文化サロン阿倍野

1日・短期講習会 神道の作法―装束と衣紋道―
木村徳宏(文学部助教)
- 3月

4 土

皇學館大学共催講座

近鉄文化サロン阿倍野

『日本書紀』を読む
「海幸・山幸説話と鸕鷀草葺不合尊の誕生(2)」
「神日本磐余彦尊ら四男神の誕生」
大島信生(文学部教授)

11 土

皇學館大学共催講座

近鉄文化サロン阿倍野

古事記を読み解く―神武天皇〜孝元天皇の段
「孝昭天皇〜孝元天皇」 白山芳太郎(文学部教授)

18 土

皇學館大学共催講座

近鉄文化サロン阿倍野

1日・短期講習会 木簡の歌と梅・桜
遠藤慶太(研究開発推進センター准教授)

20 月

第4回 皇學館大学・三重大学合同シンポジウム

ハイトピア伊賀

マチとムラから考える〜伊賀で暮らし続けるために〜
【シンポジスト】 豊福裕二教授(三重大学)
板井正斉准教授(皇學館大学)
【コメンテーター】 岩名泰岳氏(美術作家/前・島ヶ原村民芸館「蜜の木」代表)
【ファシリテーター】 山田雄司教授(三重大学)

25 土

皇學館大学共催講座

近鉄文化サロン阿倍野

神道と仏教―神仏習合と明治維新の神仏分離―
「隠岐の島における神仏習合と神仏分離」
河野 訓(文学部教授)

25 土

皇學館大学 ふるさと講座

名張市役所 大会議室

美旗古墳群と伊賀の青墓 岡田 登(文学部教授)

- 各講座の詳細につきましては、本学ホームページにてご確認ください。
- 共催講座(近鉄文化サロン阿倍野)のみ、**有料**です。お問い合わせは近鉄文化サロン阿倍野 ☎06-6625-1771へお願い致します。
- その他お問い合わせは、皇學館大学地域連携推進室 ☎0596-22-8635へお願い致します。

皇學館中学校 卒業式

3月18日(土) 10:30~ 皇學館中学校セミナーホール

皇學館高校 卒業式

3月1日(水) 10:30~ 皇學館大学 記念講堂

皇學館大学 学位記・修了証書授与式

3月18日(土) 11:30~ 皇學館大学 記念講堂

祝賀会

14:00~15:30 総合体育館メインアリーナ
※卒業生のご家族の皆様もご参加いただけます。
ぜひお越しください。

皇學館大学教育学部 卒業記念ミュージカル

演題

サンのヒナタの
まほうのとびら

★予約不要
★入場無料 ★入場は先着順

毎年大好評の教育学部4年生有志によるミュージカルを今年も開催します! 今回もオリジナルストーリーとなっています。本番まで楽しみに!

津公演 三重県総合文化センター 大ホール
津市一身田上津部田1234 TEL 059-233-1111(代表)

2/25 開場 13:00 開演 13:30

伊勢公演 皇學館大学記念講堂
伊勢市神田久志本町1704 TEL 0596-22-0201(代表)

3/4・5 開場 12:30 開演 13:00

お問い合わせ先

皇學館大学 教育学部研究室
TEL 0596-22-6458(直通) 0596-22-0201(代表)

元陸上競技選手の為末大さんは社会的でおつちよこちよいと思っただけで自身の性格が、海外を転戦するようになると海外の内情に思慮深いと気付いたそうです。四面に就職内定者の声を紹介していますが、後輩へのアドバイスとして「自己分析をしっかりと」とのコメントが多く寄せられました。自分の強みや役割は他者との関わりの中で見えてくるものです。ぜひ周囲の人と積極的に交わり、たくさん経験をして、等身大の自分探しを。

編集後記

「これからも書道を通じて人間形成に努めるよう、精進してほしい」と学長より励ましの言葉がかけられた。 小倉先生のご指導のおかげでたくさんの部員が入選することができ、嬉しく思う。今後も一人ひとりが地道な努力を積み重ね、来年はさらに多くの部員が入選できるよう、指導、アドバイスをしたい」と熱く語った。

皇學館大学生テレビ局が優秀賞を受賞!

平成28年度「社会人基礎力育成グランプリ」中部地区予選大会



ご指導いただいている地元ケーブルテレビ局の五十嵐さん(右)、新田教授(左)と喜ぶメンバー

経済産業省共催の平成二十八年度「社会人基礎力育成グランプリ」中部地区予選大会において、皇學館大学生テレビ局が見事優秀賞を受賞。二月二十日に東京・拓殖大学茗荷谷キャンパスで行われる決勝大会への出場を決めた。

ビジネス環境の変化に伴い、経済産業省では基礎学力や専門知識に加え就職前に備えておくことが望ましい能力として①前に踏み出す力、②考え抜く力、③チームで働く力を「社会人基礎力」と定義。その育成を目的に、平成二十年より大学(短期大学・大学院を含む)に所属する学生の活動(大学が教育の一環として実施している取組み)を対象に「社会人基礎力育成グランプリ」を開催している。

同大会における審査のポイントとは活動の成果そのものだけではなく、活動を通しての成長度合いやどのような「社会人基礎力」を身に付けたのかも含め総合的に判断される。登壇した大学生テレビ局・局長の田中貴子さん(現日三年)は活動の中で養った力をアクション・シンキング・チームワークの三つに分けて発表。自分の知識の範囲内で番組を作りがちなメンバーが同テレビ局の活動目的を再認識し積極的に学外へ足を運んだことで個人の興味・関心を超えた企画を出すようになったこと、一部のメンバーに負担が大きいのしかかっていた問題については全員で情報を共有し、長所を生かした役割分担にしたことでチーム内の連携がうまくいった例など課題を乗り越えてきた過程を具体的に述べ「これからもますます地域に貢献できる人材を育成する場として成長させていきたい」と同テレビ局の今後の展望を語り、締めくくった。

増した大学生テレビ局・局長の田中貴子さん(現日三年)は活動の中で養った力をアクション・シンキング・チームワークの三つに分けて発表。自分の知識の範囲内で番組を作りがちなメンバーが同テレビ局の活動目的を再認識し積極的に学外へ足を運んだことで個人の興味・関心を超えた企画を出すようになったこと、一部のメンバーに負担が大きいのしかかっていた問題については全員で情報を共有し、長所を生かした役割分担にしたことでチーム内の連携がうまくいった例など課題を乗り越えてきた過程を具体的に述べ「これからもますます地域に貢献できる人材を育成する場として成長させていきたい」と同テレビ局の今後の展望を語り、締めくくった。

活躍WATCH!

目標に向かって主体的に取り組み、いきいきと活躍する学生にスポットを当て、紹介します。

学長奨励賞受賞者	
◆乾 颯 人 君(教育2年)	十種競技 8位 (第85回日本学生陸上競技対校選手権大会)
◆和 手 慎太郎 君(教育2年)	弓道・成年男子近の 3位 (第71回国民体育大会)※三重県代表メンバー
◆井 豫 規 人 君(教育1年)	男子砲丸投 3位 (日本ジュニア陸上競技選手権大会)
◆読書法展 入選	
鈴木 玲 名 さん(国史4年)	
後 藤 貴 希 さん(国史4年)	
谷 利 香 さん(国文3年)	
前 川 史 奈 さん(教育3年)	
大河内奈那子 さん(教育3年)	
佐 藤 天 美 さん(現日3年)	
井 上 亜 耶 さん(国文2年)	



今後の精進を誓う部員たち

日本武道館は、一九七〇年に第一回世界空手道選手権大会が開かれた「空手の国際化」の原点となった場所である。その聖地で平成二十八年十一月十九日、二十日の両日、第六十回全日本大学空手道選手権大会が行われ、皇學館大学空手道部も四



日の丸を背負って国際試合に出場するのが夢と語る乾君



「これまで以上に厳しい練習に励みたい」と井豫君



十二月十四日には、第三十三回読書法展に七名も入選する快挙を成し遂げた「書道部」に対して学長奨励賞が授与された。読書法展は伝統的な書を志向する質、量ともに国内最高水準の公募展。出品数は公募、役員、会友あわせて約二万五千点にも及ぶ。書道部委員長の前川史奈さんは「上

昨年十一月十七日、大学本部にて乾颯人君(陸上競技部)、井豫規人君(同)、和手慎太郎君(弓道部)の三名に学長奨励賞が授与された。

乾君は学生陸上競技の最高峰・日本学生陸上競技対校選手権大会(九月二日、四日)に出場。十種競技で自己記録を大幅に更新し、八位入賞を果たした。井豫君は二十歳以下の日本一を決める日本ジュニア陸上競技選手権大会(十月二十一日、二十三日)において男子砲丸投に出場。自己記録を六六センチも更新する一六メートル六九センチの記録で見事三位に入賞。和手君はいわて国体(十月七日、十日)の弓道競技に成年男子三重県代表として出場し、準決勝で惜しくも敗れたものの、三位決定戦で勝利し、三位を勝ち取った。

今後の目標について乾君は、出場が決まっている日本選手権で六位以内をめざすと決意を語り、井豫君は強豪校でなくて

も努力次第で良い結果が出せることを証明したいと意気込んだ。和手君は弓道部全体の技術・成績の底上げを誓った。

清水潔学長は「今回の結果は皆さんそれぞれの栄誉であるとともに、本学にとっても大変喜ばしいこと。一つの賞を得るための努力を今後も惜しまず、自分に対してさらに高く厳しい目標を掲げ、その達成に全力を尽くしてください」と激励した。



「これからも書道を通じて人間形成に努めるよう、精進してほしい」と学長より励ましの言葉がかけられた

空手道部が四十年ぶりに全国大会に出場